

沖縄タイムス報道に対しての 2021 年 12 月 5 日 永津禎三のメール

沖縄タイムス社
編集局長 与那嶺一枝 殿
社会部長 吉田央 殿

永津禎三です。

私が、貴社の 2021 年 12 月 2 日付紙上（27 面）の年表で「1768 年 正殿修理。階段が未広がりになり、大龍柱が台座に乗せられ向い合わせになる」について誤報であり、即刻、訂正と謝罪の記事掲載を求めたことに対し、沖縄タイムス社の社会部長ともあろう方が、次のような見解をお持ちなのに本当に失望しています。

「訂正・謝罪につきましては、向きが「正面」と確定したものを「向かい合わせ」と書いたのであれば必要と思いますが、今回は事実を巡る見解が分かれているケースなので、今後は記事で書いたように「寸法記に書かれた」という限定的な表記を、年表でも心掛けるということで、ご理解いただきたいと思います。」

貴社が正確で公正な報道を目指しているということを前提にしてご意見申し上げます。

見解が分かれている、片方の説をあたかも事実のように報道することを、偏向報道と言います。片方の説、つまり、「寸法記に描かれたように確かに大龍柱は相対向きに立っていた」これを貴社が間違いなく正しいと認識していらっしゃるなら、その根拠をお示しください。

先に、お送りした、私の〈絵図の「読み」とは何か〉上・下、10 月 19,20 日琉球新報掲載の後田多敦「大龍柱向きの根拠」、11 月 23 日,24 日琉球新報掲載の伊佐眞一「首里城復興基金と大龍柱」を読まれてなお、その根拠があるのなら、ぜひ伺いたいと思います。

同様に、貴社の社説（2021 年 12 月 3 日付）にも、問題点が散見されます。

「検討委は、正殿の設計書に当たる「寸法記」（1768 年）と、「御普請絵図帳」（1846 年）などの尚家文書で、大龍柱が相対向きで描かれていることを重視した。」

「首里城は造られてから何度かその姿を変えており、大龍柱も数回作り替えられてきた。正面向きの時代も相対向きの時代もあった。」

「検討委は「寸法記」などを正殿の内部や外部が分かる総合的な史料と評価する。その考えに立てば向きの判断は間違いと言えない。」

これらは全て、偏向報道と考えられます。

これらは、おそらく、技術検討委員会委員である伊従勉委員や安里進委員の見解などに依拠されていると思われる。

伊従勉委員も安里進委員も、絵図に描かれた向きに立っていたことに何の疑問を持たず、これを前提に全ての論を展開しています。

例として、2020年11月11日沖縄タイムス掲載の伊従勉「首里城正殿と大龍柱の検討」を俎上に載せましょう。伊従氏は次のように述べています。

「実は時代により向きが変わった事実は研究者間では共通認識だが、一般には共有されていない。問題は、どの向きが真実かではなく、いったいどの時代の正殿と龍柱を復元しているか、にある。」

「平成再建の30年間の史的研究の進化は、18世紀の変化の概要を史実と絵史料から明らかにした。」

「変化の理由付は筆者の推測であるから、ご批評を乞いたいが、王府史料・絵図は公式記録で疑う余地がない」

私がこれまで幾度となく指摘して来たように、「絵図では認識されやすい向きにものを描く傾向があり、絵図だけでは向きは特定できない」という事実を踏まえれば、上記の見解が全て砂上の楼閣に過ぎないことが明白です。

さらに伊従氏はこのような愚論を展開しています。

「さて、西村貞雄氏は1988年段階で、『寸法記』大龍柱図⑥と戦前の大龍柱の左足前足の付き方が逆と指摘したが、⑦の絵図でも同様なのをどう考えるべきか。戦前実在の龍柱も、実は互いに向き合うことによって、それぞれ前足が掲げる宝珠が御庭側を向き、大唐玻豊中央の大火炎宝珠図と呼応したのでは無いか(図3)。1768年に、それぞれの龍柱の前足が絵図とは逆に施行された可能性がある。」(永津補足：⑦は1846年「百浦添御普請絵図帳」)

設計書である「寸法記」のように実際には施行しなかったのではないかと述べている訳ですが、「寸法記」は設計書なのでしょう。「普請絵図」を「設計書」と決めつけるのは軽率でしょう。普請された状態を描きとどめた記録書と考える方が妥当かもしれません。もしも伊従氏の述べるように設計書と施行が異なるとすれば、何故、1846年の絵図で同じことを繰り返しているのでしょうか。まさに、伊佐眞一氏が琉球新報紙上で指摘されたように「思考が混乱」しています。

さらに、設計書と施行が異なるなら、大龍柱の向きも施工の時に寸法記の向きとは異なる向きにしたのではないかという推論も成り立ちます。それを、前足の付き方だけに限定するのはもはや論理ではありません。

「宝珠」がどうのという推論が、いかに砂上の楼閣でしかないか、実に明白です。

しかし、論理的思考ができていないことよりも、もっと決定的な問題があります。それが、「絵図の読み」についての無知です。

繰り返しましょう。「絵図では認識されやすい向きにものを描く傾向があり、絵図だけでは向きは特定できない」。

この大龍柱の前足の付き方、右側の阿形の左前足と左側の吽形の右前足が下がって描かれているのは、それぞれ、左前足、右前足を描いているのではなく、認識しやすい前足の形、つまり上にあげ宝珠を握っていて、頭部などの複雑な部分と重なり合ってしまう前足ではなく、分かりやすい下に降ろした前足を描いているに過ぎないのです。古代エジプトの壁画やレリーフで親指側からの横向きの足(認識しやすく美しい形)を2本描いているのと同様なのです。私は、絵の巧拙を指摘しているのではなく、絵図というものの仕組みを語っているのです。これを伊従氏は全くわかっていません。技術検討委員会の全員がわかっていないのです。

近代の透視図法のように、「一点からの視点で絵は描かれるもの」と思い込んでいる浅はかな見方では、絵図は「読み」を誤ってしまうのです。

沖縄タイムス報道に対しての 2021 年 12 月 27 日 永津禎三のメール

沖縄タイムス社

吉田央社会部長 殿

Cc; 与那嶺一枝編集局長 殿

永津禎三です。

事前に送付させていただいた、N27 に寄せた私の拙稿はお読みいただけたでしょうか。

この内容を踏まえて、ご意見を申し上げます。

12 月 2 日に当日付貴紙の記事について誤報の訂正及び謝罪記事の掲載を求める意見を申し上げ、12 月 5 日の再度の私の意見に対して、社会部長からは次のようなメールを 12 月 6 日にいただきました。

.....

永津禎三さま

お世話になっています、沖縄タイムス社会部の吉田です。

本日はお時間を取らせてしまい、申し訳ありません。また貴重なご意見をうかがわせていただき、誠にありがとうございました。

永津先生とお話させていただき、社内で再協議した結果、やはり 1768 年の記述が正確でないあの年表をそのまま放置してはならないと考えました。また、検討委の拙速な意思決定の問題点も、あらためて記事にする必要性を感じました。

訂正も検討しましたが、それだけでは目立たない小さな記事になってしまうため、この議論を深掘りする記事を新たに掲載し、同時に年表も正確な内容のものを再び掲載した方が、より読者に伝わるのではないだろうかと考えております。

その中で、投影法や透視図法が成立していない時代の絵図では、形は認識されやすい向きで描かれているだけで、図が横向きでもその向きに立っていた根拠にはならないというポイントも、再度伝えたいと思います。

検討委側にも再取材する時間が必要なので、来週をめどにスペースを割いて読者の理解が深まる記事と年表を掲載したいと考えています。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

沖縄タイムス社 編集局社会部

吉田央

.....

私としては、最低限の誤報の訂正と謝罪文掲載を求めただけです。

それに対して、社会部長は、自発的に、議論を深掘りする正確な内容の記事を掲載すると仰いました。

12月20日に掲載された記事「大龍柱の向き 謎のまま」が、この、「議論を深掘りする正確な内容の記事」なのでしょうか？

40年間、沖縄タイムスを購読し続けてきた（そして、尊敬すべき多くの先輩としての記者を存じ上げる）私としては、大変驚き、失望しています。

正確な内容を目指されたという年表ですが、「1508年 大龍柱が正殿前に建てられる。向きは不明」「1712年 再建。正面を向いていたとみられる」については、おそらく、沖縄県史図説編などに依拠されていると思われませんが、従前からの指摘のように、この沖縄県史図説編などの記述そのものが、安直に絵図によって向きを特定しようとしているため信頼性に欠けるものです。

そして何より問題なのが、1877年に大龍柱が正面向きだったという、ルヴェルトガの写真によって明らかになった史実（これだけがここまでの年代の中で確定的な史実）が年表のしかるべき場所に書かれることがなく、「2020年11月 首里城を撮影した最古の写真が確認され、大龍柱は正面向きだった」と、こんなところに1877年の年代記載も無く書かれていることです。

年表全てに、「投影法や透視図法が成立していない時代の絵図では、形は認識されやすい向きで描かれているだけで、図が横向きでもその向きに立っていた根拠にはならない」つまり、「絵図だけでは根拠にならない」という認識が欠如しているのではありませんか？

何が史実であり、何が解釈にすぎない事項であるのか、しっかりと認識し直して年表を作成しなければ、正確な内容の年表にはなりません。

「検討委側にも再取材する」のなら、なぜ、「絵図の読みを誤っているのではないのか」と尋ねて記事にしないのですか？

繰り返しになりますが、私は、「絵図が間違っている」などとは主張していません。「検討委側の絵図の読みが誤っている」と主張しているのです。

以下、検討委側のコメントの垂れ流し報道（まさに大本営発表）は、内容も報道姿勢も酷すぎます。

〈総事務局の担当者はあくまで「学術的な検討」だとして、専門家が判断すると強調。〉

私は、学術的な問題を指摘しています。そして私は専門家です。それを無視し続けているのが検討委側です。なぜこれを指摘して記事にしないのですか？

〈田名真之委員（県立博物館・美術館長）も「政治的問題ではなく、学問研究の問題。広く議論して決めるものではない」とする〉

上記と同様、私の指摘は学問研究の問題です。狭い「琉球史ムラ」学会内に閉じず、広く議論すべき問題です。また、政治的問題でないかどうかを、どのような根拠に基づき田名委員は断定できるのですか？ そして、（政治学と

いう学問があるのに) 政治的問題は学問研究にならないのですか? なぜ、記者はこのように指摘して記事にしないのですか?

〈今後、寸法記の絵図は間違いだとする説得力ある論証が出てくれば、学術論文で議論し、工事段階であっても案を見直す必要があると指摘する。〉

安里氏は何度も間違いを繰り返していますが、「絵図は間違い」などとは指摘していません。「絵図の読みを検討委は誤っている」と指摘しているのです。学術論文など必要のないレベルの、記者が質問し、それに答えるだけで終わる内容です。

〈「検討委の案が絶対正しいとは思わない。首里城は謎だらけ。学会などで議論し、社会全体で検討を続けてほしい」〉

検討委の案は、論理矛盾の甚だしい、誰がみても誤った案です。中学生でもわかる論理矛盾であり、学会などで議論するレベルではありません。

それにも増して、「琉球史ムラ」の学会にまともな人は誰も投稿しませんし、仮に投稿したとしても、自分達に都合の悪い論文は、おそらく受理もされないでしょう。

こんな、大龍柱問題を「琉球史ムラ」学会に閉じ込めようとしかできないほどに、沖縄の学問は歪められてしまっているのです。まさに「学問研究」の大問題です。

先に送付させていただいた、私の N27 に寄せた論考の、「キャプション差し替え問題」のような、沖縄の学問を歪めてしまっているであろう問題こそ、沖縄タイムスが総力を上げ、追及すべき問題なのではありませんか?

40 年来の愛読者として、沖縄タイムスの奮起を期待しています。

p.s.

首里城火災間もない 2019 年 11 月 4 日付貴社記事〈【大弦小弦】首里城「計算されたゆがみ」〉を見つけました。

〈▼前回の復元が国中心だったのに対し、今は県民の熱が高まる。安里さんは「最大の変化。再建は急がなくていい。左右も上下もなく、多くの県民が参加できるようにしてほしい」と望む。〉とありました。現在の安里氏の態度と 180 度異なります。

この記事を書いた阿部岳記者の記事や書籍について、今まで私は大変に敬意を持って接してきましたが、この問題について、このような記事を出しっ放しで放置しておいて、記者としての責任は果たせるのでしょうか。

今、まさに、阿部記者が率先して検討委の態度を追及すべきでしょう。奮起を期待しています。